

平成 24 年度第 9 回小学校ゼミナール記録

2013 年 1 月 10 日(木)

於：広島大学附属小学校

参加者：福田博人(司会), 他 12 名

1. 協議事項

三つのグループに分かれての算数科における授業作り及び授業展開の議論

2. 協議内容

今回は事前に授業者により作成された小数を整数で割る計算の学習指導案を基にして、「わり進める」と「倍」に関する議論がなされた。前回での小ゼミで提案された教材とは大幅に変わった内容の教材が、今回の小ゼミで提案された。指導案改訂の理由は前回の教材であれば小学校五年生で習う割合の単元での内容と差異が無いからである。発表者の主張は、小学校四年生で習う小数を整数で割る計算の領域ではあくまで計算を主とするものを教材化しなければならない、ということである。この主張に対して、言語活動の充実を目指す授業作りを意識したとき、計算方法の形式のみを扱うような教材では不十分であり、計算結果の意味も視野に収めた教材作りをする必要があるのでは、という意見が出された。前回の小ゼミにおいて取り上げられたように、現在の日本の教育における大きな理念として生きる力の育成が掲げられており、探求型学習による能力の育成が重視されているため、今回の教材に対して探求型学習をさせるような修正が必要なのではないかという結論に至った。

そして、探求型学習をさせるような授業の展開として、1 よりも小さな倍量に対して、求める全体量は基準量より大きくなるのか小さくなるのかを、根拠も述べながら説明するような展開方法がよいのではないかという意見が出された。これは、小学校四年生までで習った内容を考えると「倍」という言葉が付くと、その段階で求める全体量は「大きく」なるという先入観が存在し、求める全体量が「小さく」なる倍量も存在することを児童に知覚させるためである。このことを小学校四年生の児童に知覚させておくことは、小学校五年生で習う小数を小数で掛ける領域への大きな足掛かりとなるため、このような展開を行う意義も明確となる。

最後に今後の課題としては、扱う教材そのものに新規性を見出すのか、それとも既に教科書等で存在しているような一般的な教材を授業でどのように展開していくのかという流れの中に新規性を見出すのかを定めた上で、今回の教材と前回の教材等を比較しながら教材及び授業での展開を再考することが挙げられる。

(文責：福田・將基面)